

特集：大学説明会

学生による大学説明 —マンチェスター大学留学について—

白戸 秀（筑波大学 生物学類 4年）

生物学類の大学説明会にやってきた高校生に、マンチェスター大学への留学について話すことは、私が、受験生のころに、マンチェスターに行ってみたいと思い、実際に行き、そして帰ってくるという一連の出来事を、総括するという点で、私自身にとっても有意義なものだった。同時に、受験生が生物学類を知ること、また、大学生活や留学を想像する上でのささやかな一助となったのならよかったと思う。

説明会の後に、わたしの話を聞いて面白そうに思ったから、と個人的に話に来てくれた受験生がいた事は、本当にうれしかった。人前で話すことが不得手な私が、あんな大勢の前で話した甲斐があったというものだ。また、留学をしてはみたいものの、生物学類に入ったからといって必ずしも留学ができるわけではないということに気づいて話しに来てくれた受験生もいた。全くその通り。私が受験生だったころには、そんなことに気づきもしなかった。生物の交換留学に限らず、様々な留学の機会が、全学を通じてあることを伝えた。学群生にとって、留学の機会というのは、大学の掲示板を見まわしてみれば、あちこちにあるのだ。生物の交換留学は、そのひとつにすぎないとい。もちろん、それらの中で、これが最も、学生にとって良い仕組みであることも事実である。交換留学ということで、筑波大学に学費を支払う分でマンチェスター大学の学生になれるという点、留年をせずに卒業できる点、などももちろんであるが、何より、大学3年生に、いきなり海外のラボで一年間研究をする機会が与えられるというのは、なかなか、驚くべきものである。

人生で初めて日本を離れ、一人マンチェスターの空港に、スーツケース2つと到着したときの心細さは、今でも覚えている。違う世界。違う建物。英語の看板、英語でしゃべる店員。乱暴な運転のタクシーに乗って、宿舎にたどり着く。レセプションを見つけたらでも一苦労、レセプションで自分が何者であるかを伝えるのも大変。宿舎にいたのは中国人、韓国人、インドネシア人。英語でコミュニケーションするしかないのだが、うまくいかない。寝る前に、翌日自分が使いそうな文章を英作文して、その日自分が言えなかった文章を英作文するのが日課になった。

ラボでの活動が始まってからは、海外ラボで働くのは大変なことだと実感した。そこでは、非英語圏の人間が、イギリス人と対等に渡り合っている。当り前の光景になっているが、わたしがそこに至るのは結構苦労するだろうなと思った。筑波大学の担任に言われた、「そのラボで戦力にならにやいかん」、という言葉が重くのしかかる。とてもなれそうにない。荷物にならないだけで精いっぱいだ。結局、親切に甘えて荷物になった。でも荷物なりに勉強させてもらえたとし、実験も、ちゃんと一年分、前に進められた。

マンチェスターでの生活も残り少なくなったところに受けたTOEICのスコアが、信じられないくらい上がっていた、ということラボのメンバーに話した。実際、自分では大変に驚いたのだ。彼女は、「私は全然驚かない」と言った。「だって、最初に来た頃には、君の言いたいことはなんだかさっぱり分からなかったから」。やっぱり、はじめの頃には、なんだかさっぱり分かられてなかったんだ。背が伸びるのと一緒に、自分の成長というのには気づかないものなんだなと思った。

振り返ってみれば、私にとってマンチェスターが、人生の23分の1を過ごした場所になったわけで（しかもそれが、大学3年生という時代に）、日本に帰ってきた今、あたかもそこが、自分の故郷であるかのような感覚がしてしまう。ギリシャ人は、ギリシャの天候が良すぎるせいだろう、マンチェスター、このひどい天気、早くギリシャに帰りたい、と言っていたものだが、私にとっては、そこにあった曇り空も雨も、そして時々晴れた日（空の青さや、風）、空気の冷たさ、忘れがたい。きっといつかまたマンチェスターに帰る日が来るだろう。そこに今も暮らす先生や友人に会うために。もっと英語ができるようになって。もっと生物について知って。帰国した、今、勉強は、始まったばかりだ。

Communicated by Shinobu Satoh, Received August 17, 2009.